

お母さん、大すき

千葉県 鎌ヶ谷市立北部小学校三年

伊藤 颯海

「はや海、はやくしなさい。」と、いつもお母さんにおこられる。ぼくのお母さんは、とてもこわい。とくに、ぼくがうそをついてしまった時は、「そんな子は、いっしょにいたくない。」と言われ、とてもかなしかった。ぼくは、かなしくてないてしまった。お母さんもないていた。ぼくは、お母さんがないたことにびびりしてしまった。そして、お母さんをなかしてしまったことに、もつとかなしくなってしまった。

お母さんは、はたらいているので、バタバタといそがしそうにいつも動いている。ぼくが、学校へ行くときも、いっしょに家を出て、帰ってくる時も、いつも学どろが閉まってしまうギリギリの時間にぼくをむかえに来る。その時にならず、「おそくなつてごめんね。」とぼくの頭をなでしてくれる。ぼくは、お母さんの顔を見るととても安心して、いつもだきついてしまう。すると、お母さんは、もつと頭をグリグリなでて「さあ、帰ろうか。」と手をつないでくれる。お母さんの手は、温かい。ぼくは、その手が大ききだ。

ぼくは、毎日、お母さんにおこられる。でもそれは、少

しでも、ぼくが、一人でできることが、多くなつてほしいと思つているから、おこるんだと思う。あと、いっしょにいつも楽しい時間をすごせるといいと思つているから、おこるんだね。ぼく、いろいろがんばるからね。ぼくは、知つてゐるんだ。おかしやジュースを、食べたり、のんだりしてゐると、かならず半分にしてぼくにしてくれること。わすれ物をしないように、いつもかくにんしてくれること。ごはんもぼくのすきなおかずを作ってくれること。いつもぼくのことを考えてゐること。いっばい、いっばい知つてゐる。でも、またぼくは、お母さんをおこらせてしまうかも知れない。ごめんね。ぼくは、お母さんが一番大すき。ありがとう。